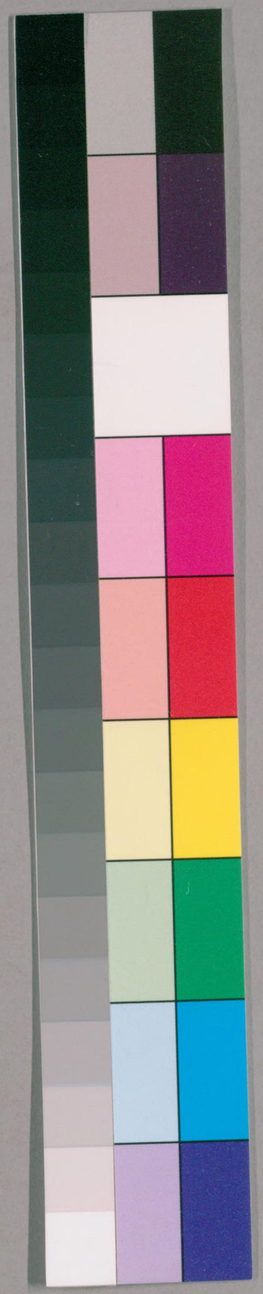
# 丹鶴叢書

草根集 十二

117
105
2

東京圖書館
和書門
叢
類
別
ね
函
二
架
二
號
一〇五
冊



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

草根集第十二

故柳原芳楚納本

柳原家蔵

康正元年正月朔日試筆

春天象

春地儀

春人事

同十一日武田大膳大夫信賢家にて

しふ

早春

鶯

暁帰雁

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

慶賀　そのかみのこともものの神のみまへん(の歌)宿こそ学ん

十日畠山入道賢良の家にて

早春衣　ものさる衣裏の古風ふるもものそこみそ

牧春駒　みまきさうまそそみそ

家の風　さそそそくいこそのそそる風のかそる社のもつこそ

名所山　いつの世そ女神男神もまもる(歌)ものりかん

廿日招月草庵の月次ふ

雪中日長　初そそんのそそる雪をふみのもふそる百せ

立春　春まそそ十日あまりの二さ消をそ度のほそ雪める

顕恋　つこそみまその浦の神の名そふの三日の夜もふ



岸竹　おこしてふみなめの招そもふを垂る竹川の岸

廿一日人こそ合をしふ

海邊霞　消そくる雲のそもひつめる延の磯もやそのかすえ

餘寒月　もそそそ秋月雪ふそそそ昔ふしのおまも消そ

松年久　そふそる山のふもそそまつそそる風のあふ

廿六日清水寺平等坊権サ佐新田秀月ふ

梅香深衣　変梅の匂いふそくもぬそ(の歌)ふる風

初春　春まそをやそそもふ京のそめる緑そおそまされる

恨恋　さのふやつこそをうこんそねそ年のふのそそも

山寺雨　法のるふぬ日もおそそふやふと志ん家の山寺

廿八日細川三斎大納言殿へ
春松千年 ふる葉さへ枝のあらそへんまゝの詠なるを
早 春 もつまでもの葉もそるやまのはてぬまく
雪の鳥迹 へそ行ふる道とそみの浪風小雀や来そなくのる
関 鶏 詠ふるくに宮ゐさ三田ゆふつ鳥のをかのしたく
廿九日高松大神宮主橘豊文もとへ遣す
初春日 星なき浪なりをしのとの一の松よかくもるもと
春田雨 秋の田にあさの小花かた民田とうるもみるやうて紙男
覊中浦 枕も社おもふんやのいそのうきものゆるもの松のいそのうき

二月七日三井寺仏地院僧都長算坊へとふみ



おとふみ一中ふ
初春霞 清やそもその春やうみをかつめるかりもの山
契待忌 おもぬるふ升初秋よ紙め契くく松まつの法
薄暮鐘 芝のるの静なる日のくるまふ入おの法もまくまれ
九日同寺新羅の社の法的よふるとへまく
法ふのるーなるふ
朝 霞 もものそ公春の彩尸ゆるる七海雲法ふ鳥て日の彩
忘 忌 ま海さゆ升ゆめ夢の彩尸ゆ英よそるそみしる
山 寺くも汲社そゆるもる古一きるふきのふれるの水
十一日同坊へ月次あるーふ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

宋遊梅花　春さて梅の匂ふ折ふし風もやゝぬる廿日の夜

霞春衣　たつたつゝものゝ色柏もえ出る八束の乱髪なる孫と

曙山雪　しら雲の社のこゝろ立のぼりても消えくさぬ雪のいろなる

雪河亭　しのゝめやひかり動かぬうす氷こ類みて川よこれ新やあらん

峯雲　生のこりるしやそのこゝろのもつとみねとも岩の松もうつりて

廿日草庵の月次よ

梅移水　初風にのもやうもさゝろにくとの一の枝をもる風

暁春月　二月のあけぼのゝころも咲おくれぬ月のまゝ花そつゝまる

近見亭　みるめるる人の袂やちるとなん松ゝもちの浦のりそ矢

當坐　帰鳥　りてのねの夏もかつるらんちのたちものおくれぬふ



霰　うつとなくのりまのこる家ちに寒をむすく嵐ハ

海　ぐらくぬ無名異日そつゝのふ人の住ぬ人のなき島　孜类

田柳　まを田にゆる田の根のいなの延ちゝれてる人まなし

江帰鳥　かるをゝをゝぬ翅のうにものさゝ

園竹　秋ふもかゝぬそのもの世青葉陰ちる嵐の

廿ヶ日清め平等坊月秀月次よ

暁天春月　風ゝゝ月なゝみそ妹せの山の裏の夜ゝのそら

遥見帰雁　あるゝや裏む嵐のまちにを引もの一の松

悦偽言亦　ゝゝぬもゝのあるゝんぬ床の浦舟

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

花下送日　みる人のなこそなるもの
秋夕傷心　そのふもとさへうせくもぬ
披書恨遠　むきのむもしさしてよむもを
山寺夕鐘　夕まぐれ（入）つきそむる
三月二日山寺入道浄元明栄寺ニ寺ニ
くらせらるゝ
早春天　くもの天のそらを吹
宋居花　静なるやいつもの
後朝恋　ぬるそむ別
旅宿　ふるさにかゝる
（雪松）



四日渋川右馬助義鏡母うせまくに三七日
の追善の仏ゆゑまかりて次に二年を
申て
落花　花ゆゑ神なる露ちる
寄花離別　まそでる花ゆゑ
五日細川右馬助入道
なることくくて
花慰老　をめもをまくも
寄雲雀恋　空在のよ
春暁鶏　鳥くくなけ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

春山家　ゝをく客位なるやうの物もあるは是をいふ

六日花　鳥井中納言祐雅家にて詩歌の席にて

客月花　その年月を後あまたまで人のあまたいふ

帰　恋　別離の神の匂ひをうつるまでの時の変

山家灯　ふるさとをはなれて入るをもとめて詠

宝徳二年正月二日の私の基をおもひ

神仙楽　くおもひ出をおもひ出へ

きよらかにて祝ふ詠もあるをもとめ

や春ふかき庭の梅ほのかにうつくしきさまぬ

石見後よおもひ付をもとめよもぎ





らさゝきく宝徳三年十二月六日の私の基

之基　おもひをよびくに法楽をこゝろ春のこのめ氏

ふるゝ詠ある一字も遠き不思議の

ゝく百首の法楽をこゝにはるかをやゝ書添

し侍る

立　春　家ふかき入まをもとめ梅の匂ひ

見　花　日をかぞへ松なほふかき

夕　立　日ぐらしをもとめ鐘を浦の浪の夕立の

残　風　ものすゝ萩のもとめ風をまつてやゝ秋を告

山　月　地毎ふかきもとめ月のある

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

落葉紅の落もるをみもろの
雲ゐ
ゆふされば
木ゑ
神祇
十二日人
道
尾
尋花
山家花
花面影





十八日戒
朝花
嶺月
歳暮雪
雪夢
十九日修
交花
塩屋花
雪花別
雪花旅宿

廿日草　花の月　みぐ　又　そこらつるもの　まるゝせ
落花　ちるさしてよも　命の内　みぐ　又　そこらつるもの　まるゝせ
田蛙　なきてふく　水の　はのいきの　をふるやさ　ふるもの　まるゝ　山田
釈教　二あるまをもむなく　くもあさ　ーこの　空の　今よいる人
瀧上花　谷川の　せゝよかるゝ　白浪や　たゝのこなるゝ　ゝゝくゝも
家車恋　くけむぬ人の　のゝそゝ　車とゝく　道ゝもし
林鳥　なるゝりもの　契もあさ　ーの　花の　母の鳥の　ゝゝをるゝ

廿二日恩徳院ゝゝ寺ゝくゝ　会よ

夕雲雀　ゆく人の　雲々　けそまての　ゝゝるさ　へ　ゝゝ在の　麻のしる
水邉藤　月そゝる　関や　のゝさゝし　ゝゝも　ゝゝもあゝゝ　ゝの　夜川の　夜





故郷恋　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　髪の　宿あゝ　ゝゝ　ゝゝ　家の　西海

廿六日清水平等坊四季月次よ

朝歎冬　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
暮春鶯　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
湖上舟　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
水郷柳　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
家庵恋　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
名所市　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

四月三日ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

首夏　ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

祈恋　人心あらす神よいのるしも思ひまさるやまとも

暮雨社　雨社のこもりくらしつるかみのしるしをいかて人に見せまし

四月四日菅原文時朝臣家一読

初春　春のそらとものあやの衣手に中々あやひうん

夏草滋　あさちはら露ふみわけて風そ吹くのちやまひこや茂るらん

紅葉如錦　山の名のまことの錦ちりしきて秋や苔の莚のこすらん

洛中雪深　そらさえて雪ふりつもる冬の夜の月のみ

宿鳥恋　一こゑに入江のそこもうつろひて流れあはぬ千鳥なくなり

河鷺　白鷺のふみわけ川のあさ瀬にも立ちもおよすて立ちわつらふ

六日明星　夜の月次





遠郭公　まちわひなくやまの郭公八声のおくにかたらふ

急早苗　時なれやうさ田の苗のむらたちをゆふかけてとる早苗そ

暁逢恋　夜もすから思ひあかしつるものをあさかへりこそ

朝更衣　花のまを惜むもあやし夏衣たちかへしてかへうきものを

宿閑恋　住もやすき我やの垣代ふかくとちしあやめ人や来ん

述懐　世をいとふ人学ふへをとふらはやまひうん

九日菅原之真家朝臣

朝新樹　深緑まつ見るまきの葉もそ夏のそらこゝろの新芽

祈神恋　玉津島ちはやふる社よくもちかひそこゝろみの糸

山家竹　竹ほとる山もとこたのつゆ世をそへぬる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

四月のそらめのころ細川下野入道老折住吉法
樂とてくすそこもとへ百そうの舟をうかべ
三
春　もやまつたなまの原乃神垣
更　衣　つゝさゝ衣ハ行をゝしむかへやものもまゝ
曉　露　ちゝそなぬ袖やなゝん味の露のむもの乃里のうら人
庭　雪　道　おとゝ乃ふ袖をふ払ふそふるそのそつの礼宿の松陰
尋　恋　みゝ人の住里まてハものさゝぬ門ゝをめぐるへくも
閑　居　むさゝこにてゝつゝぬ宿ゝ
（ふ楽）
ゝ里ゝ乃ゝ
（ふ楽）
行の末ゝ
彼岸まく枝海をゝ
新樹露　字乃ふ乃ふ新ふく枝のもの枝も落る葉ゝをのそゝ
（ふ拍）





海路山　ゝしを風波のまゝ山ゝ乃波を
廿日草　毛月次ゝ
嶺新樹　叶ゝもあまゝ乃月の岩の緑さゝ
河夏月　乃社ゝ乃ふ月新神さゝくゝ
遠　恋　ふ社を新旬ゝさんのまゝ
（楽ナシ）
五月雨　當坐　さゝ乃ゝをおゝ乃ゝ乃川ゝ
（ゝゝ楽）
待　恋　さゝゝゝなゝさの浜ゝさ
雲居鶴　あかゝ乃ゝまの夜も
廿二日恵徳院まゝ

餘花在何　梅ともりともなくなつめの葉のよそもかほ
寐覚郭公　ほとゝぎすの声のよそもかほ
海村煙出　うかやく烟も思ひたえぬ里のおもかげ
廿四日恩瞻法師あつまのかたへ下るとて餞別
まかるとふ人と袂をさくもりに花をしるべのたもと
霞隔山　山ゝ人雲へだてをへてもかさなるやまの
寒岫霜　さゝなみよ八十のみやこのおもかげ
客名恨　名もむつましき都も忘れ捨てみやこ
旅行　旅行きまたしらぬ道もかさなるやまの
廿七日与正般蔵名字一方のたもと





人ゝこゝろ尾ゝきたゝ十ゝ淡ゝの手ふ
梅香留袖　あるせぬを風ふく梅のまるや神のこゝろかな
露底虫鳴　ふもとなる庭のまをむもみく深き夢よ虫の声
夢逢恋　夢の内よかさなる稀の枝枕なこゝりそまさる
故郷嵐　形の私おもかけをもたゝのあれをも嵐そそる
晴る平等坊円秀月次
卯花　卯花ふ宝の氷をゆるの風ふをもちるのこのもし
水鶏　水鶏なる社の石井ゝをくゝるの杉のむら立
恋夢　夢ゝてつるよその衣よんふ
蛍　蛍ゝのもみよもゝぬをやるもまかん

雪風恋　つもりてはとけもやらぬ辻風の
岸竹　我ものとなびきつくも井のことを水の牛とくやしる
閑四月　当る恋　瞻法師田舎より帰る師
　　条の事ふ状をおこせあらしふかのさよ
　　ふるさとなもそくらん杉の
　　杉ふるもむも花の浪清やぬまみさちかつさみよ
八日草　名もよくまぎ一清みてふ
社頭夏　榊てふ月のあめのかなたをこさる谷の神山
井辺納涼　ふるさとはもは井のつるべ縄そうとる水よ落るとも



寄秋月恋　澄きよの月ふぬきとる秋斗落のしまを恋る杜の秋
山寺鐘　夕打くれ世の人のつとふりんおなし　秋のやまそこの落
十四日明望　の月次よ
夏　雨むし消もかきとる卯もの
夏　虫　捨くも多もぬけとまもる
夏　夢　夜の秋のみるふくハ花をぬ袂よこの内のうそふくさ
夏　月いのちこをもつみやとるらんふ髪の根み月
夕　鹿　をふるの霧よつまかふ
寄烟恋　はまふしの烟まの世もつるとみやハとそんぬ
廿日草　名もの月次よ

夏天象　新なるこいつる初月の句を知月のひのきのもとゝ
夏動物　玉匣二もの庵ゝみる昼もめつあふこゝ(ひ)のゝめ
夏人事　なまもゝ乳みまぬ夏のみゝうふ秋の秋そのもゝゝ花汚
當坐
憐　花　うゑさらしなゝゝけ世のもゝもせも狭ゝまつるんを
深夜鴫　夜をさ汚田の明るもさぬさく百羽ゝさ汚ふゝゝの雨
恨　恋　初おく秋のいろさお萬のそのめくゝまハ秋風そふく
廿三日恵法院のお会ゝ
江　蛍　新ゝめむ世をふこゝ汚のみゝて碎ゝる打ゝみる雲ハ
夕　恋　むさゝる夕ゝむゝ時ゝさ汚ハむ初ゝさ恋のむゝかゝまを
廿ゝ日平等坊系秀ゝお会ゝ



夏暁雲　ゝみるもゝ多の後の月の毎ゝ汚ほゝさ汚ふまある夜の歌
夏江芦　乾汚のまのゝまみ及川ゝも礼ゝる鳥ゝゝや汚ハをて
夏路車　風あゝて恋日の道はゆゝるゝくゝる車の牛のゐのむゆゝるさ
五月八日修理ゝ文家の月次ゝゝめとゝく
盧橘年久　ゝさ汚ゝこゝもゝゝなゝてゝ橘の汚ハむ庭ふまゝ教ゝよ
朝更衣　ゝ汚ゝあゝるあゝさ窓ゝなゝゝぬゝさゝむゝゝ汚ゝゝ汚ゝ
池　蓮　ゝるあゝゝさ汚の江ゝのまゝゝゝゝゝぬ夕ゝゝの雪
不逢恋　仏のゝんあゝふまゝゝ新むゝのゝゝさの月ゝ社ぬゝ汚ゝ
旅　泊　ゆゝゝやむ汚ゝ社風のたゆゝむふゝゝゝゝの浦舟
旧　恋　みゝゝゝゝゝゝゝぬ紙のふゝゝの出汚久ハやゝまて

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

十三日 菅原國豊 そま屋

首夏風　夏もはやよるとつ古への風のたちどころをくも海こく

稀逢恋　年のこうしもなほのさよそ又もそ夢もてまるくき

名所鶴　つの浦のこ代の友鶴なくもむておるてたくひさき

十四日 明栄 の月次

瞿麥露　秋をこめふるさかしのむやまくしかの指よのそ

朝氷室　六月の氷と出る衣をはてみつやあや汁の公のまかしー

寄鳥恋　琴をそゆるくハ時そる鳥のそうるのかるよもあさき

首夏雲　夏ふくもそれよりしらきおさぬ赤せ

對泉避暑　夏そなるさみもる滝の岩陰小日影もそる松のこ風





寄山恋　思ひ入らもあらよまをと星ぬまこきなそこのなの浪はて

古寺嵐　咲もるこみるや祇園の川嵐ゆみむつ(う楽)るせこの白波

老人夜長　老ふるのつるるこくもそ砧るき月六月

廿日 草庵月次

鵜川　そなとみそおぬまきをむきうの秋こ星ぬ魚の食を

樗誰家　あもを安そ清のもたのろ(う楽)ぬうつ雨うつむん

舟浮湖水　さらもこそそ八のみそ沖を浪る舟人

岸款冬　当るくるもの元のそをるもやものるのやまの乃も

月前郭公　一まくまる作もあ自影よ和よう浦る彩るる

寄風恋　よもいそしそなるの風の後よも我袂もうなてい

鐘声何方　風そよ秋あるかなる（主类）
廿四日雲居寺の暮の詠ふ
船中吾兩かめのこの心をみさしし舟人をさそふ
遠村蚊遣火　山家のそちの煙をのぞむ
見家思雲　ともぬまの宿もおやふ宿
廿五日石橋　旅宿祐義家にて詠ふ
首夏水　ゆをおくりしのそこてうさそみそ夜のさぬん
旧事恵　ふる中ふまをるぬの秋のさまおくそ秋のさふ
庭前松　そのそも代なそふ宿の松なる紀ふそふる
廿六日雲月次よ







盧橘　秋なる社そふ橋の句ふむのをそのふふ
河蛍　夜川ふまをふこ冷のぬるむやふ夜の芦に蛍ふん
片恵　ねふこ母のふんまをねふ浦よもふぬ恋
同座　右三首詠ふく衆議褒貶をふ
（褒）沙月涼　涼さふあるまふこの書をふ月夜ふ秋の風
（同）行路夕立　影をみ人なふあるふ夕立なのむもぬふ道のく乃竜
（同）祈空恵　なひくこふぬたのみかふこむものをめのふほふ
六月二日大猪太夫家にて詠ふく
座あるふ中ふ
早春　まもる神やほなふ紀のちふ紀あめる世ふちふく

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

戯花　花ゆゑなきにもちる桜あはれとも
郭公頻啼をきくよりもなをまちえたる
萩如錦　三四町まの秋を八百様におる
依雪待人　ふるにもしら雪待人をもいはぬ
不逢恋　後のせよおくるもあらんとも
山家客稀　山ふかみとふ人もなきをかこつ
五日草庵　よる人もまれなる
竹亭蚤来　竹のよも世のうき蚊をそへよりて
遠夕立　ゆふだちをつる鳥もみえてそ行
見増恋　ほのかにもみしまの雪もちるみと
（欠）



鶴声近枕　毛衣も枕もさえてくれ
七日鴨部之基祇園法楽
夏朝日　ふもともる霞の風よりもる日もてむ
夏暁雲　新もる乱脚をためのこる月
夏竹虫　虫のそふ八重の夫をそれてこそ一ねせ
夏恨恋　夜川のあさきをわたりみくもかひなき
夏旅宿　むさしへ行んそなきそ夜川の世々やふるめ
清水坂神護寺　ふる人跡ちまそ次
ふ一流あるもしふ
夏　雲　乱池人をもやうよりつきを泉の岩の滝

夏　衣　寄衣戀　なるもとちるもあせとこゝろの杜風もる

十一日細川上総介氏久の家に会して

山早夏　春もりをいくへのあさみ夏山のこゝろ

寄笛恋　秋ふけて誰を恋ふらん笛竹の夜ふかくなるもものうきこゝろ

杜叢祠（楽ナレ）　杜のもりこゝろもとめやおくつきを乃神

十三日夜雨聞人

立春　玉ぼこの道ふみ雪をあけの袖のうら風をやつせ

山家花　ゆくるゝ山桜戸なかくさしこもるをこゝろとも風

夕顔　さゝぬもかくれつゝきのふかる浪の川辺

古屋月　かくともいはゝみすゝてあらん人のよるやる月







鷹狩　翅うつまもし山風あらくとをふくらんそら

寄雨恋　うきこゝろのなるかほるをぬたのあぜをぬる雨

名所瀧（楽ナレ）　玉をちらすよもうつる瀧

旅泊夢　波ぢくもり夢も旅寝の浦千鳥

松（杉類）為友　契をなくこゝろもしらぬ友をしぬる砂をみの松

廿日草庵月次

扇風　杜をもくまなきほどの涼さを月の扇の風せく

夏　秡　あさの海をそぬさにかける夏あこ三の男を生るとて

負恋　恋ふるもすむもこゝろよるの名のあるかひ乃なき

菖蒲　くみとやたのつまぬきのよるまやめ杜をかさ菖

扇　　あのまゝもる家る宿の里をさられてかさ仮やつまころ仏らん

契恋　人なきさたる夜の宿るさぬなちまろそのはあさる船

蘋　　風るさし松のものかさようにおちてしみよもひくさる

　　水三日も法院のや合

夕顔　咲のもしもいくめくさもまるくタ歌もおさまるさふく

晩夏涼　夕三ふまもる露とみさ玉さぬまやのその社の廻の世

旅夢　東海やさもる山よふもるしさやよりみさやたつのタ

　　廿七る平等坊因来月次よ

見蓮　氷さおろさこゆる夕三のをおさぬ浴の音業ふ

晩夏　恨もらんかさりのもら簟夜もろ松風のふのそうを





谷松　谷の松さそのふ永さ注ちみさともされ夜さ来る

菊座各三さの影よく傳貶あさ

夜蛍　望の老をやさの現よくさふ堂さふむ

納涼　くるさ取ハるみくらん宿もしむ後の風松すく

海路　いるかものふもさ舟らさへさ書ハるぬまほの廻風

廿七日右馬以入道崇徳院法楽さく百さて

　　梅薫風　梅も匂ふるのら風や八十氏人乃神さめらし（ん類）

氷邊蛍　よるもみ也入江の里の芦の葉のふ玉堂のもしおくく

重陽宴　雲よりふさ堂のもをもちふ仏ふる夜の白菊

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

初冬時雨　秋と言月祖公めこと道もてくまを迷ふ文時
客鏡恋　まくのみうちなるそるの神よそ〻写せなる恋ハ忘人ゆ
岸苔　杉ゆやはきの苔延をき恋へもかへる世をきさ

七月七日源経信家よく読ふの七十そあつ

中子

七夕後朝　拍子　秋そこの雲の車かあそふへきうちもひのトに源
終夜擣衣　声和そおてのつもやおのるぬるもちふるゆせ
客草恋　露むそよ契も拍子打そり尾もをのそをみをハ
山寺瀧　よるほよもきみそやまる寺ふのふその瀧のせこの宮度
廿日草竜胆月次よ





暁荻風　老ん〻その曙のそメそくしとてやメ一荻の上風
田家鹿　夜竜もをぬなそのあをもくるる秋の小田
擣衣　中煙　里そこそ〻や烟をふそをそ〻ぬ
野虫　次そいあるみのそふす船をる清そるものあら
難恋　里あくいつ里の号ふもあるのふけそ多ふそらん
山榊　大和人なくや旬よ榊そのまくる風のふぬ日まる

廿三日大猪大夫若州下向とく一読そふ

山早秋　吋もあ里と夜のねせの山見やねよ〻せのあむみん
久祈恋　秋そうをあつくほ〻み人も老てもそのそぬ中小
暁関路　ちそそ〻むかそ〻ぬ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

廿六日法隆院の会ふ　　政元康元年

初秋暁露　ものや秋の寝よ清のふる神秋風乃ま人のさし夫

閑庭虫吟　庭さび社風さつをまの人けありとやるとまる後

契後世恋　なのめおけつさ世の世せ川をとかへぬ古恋やふらん

八月朔日之総分の家ふく読ふみそ一ふ

稲妻　りをまをまねくとみそくもれまるや松浦の分の秋の稲妻

秋尋恋　さろれりんのをを狩ほく社ほ安さるやとのあもちそ

秋橋　社のまもさつかをさのさるる稲ふてめらん

七日右ふ閑佐の家ふく月次、毎無あるもー

早秋月　風もく社ふ雲のふ山のもとをまの家ふ三日月乃新



行路薄　おくさく人ゆをもさ系をもさ出ぬ空の秋

鶴宿松　まとつん松さくふ系の数なつぬ式を集て鶴る寝る

初鳧　久さのたの川舟かろをやおしさのまの寄

祈恋　恋をーのみさをなさうみさらん神の後のろよ叶さ

述懐　ワの浦ふろひもちても、行をん後の指玉もえぬ多ふ

十三日平等坊ふ重月次よ

早秋雨　まなもりいさぬ社やま玉社ふさくんむ雨をこ

秋夕涙　のふらなまの法雄の夕雲も同ーさ雲の秋の涸も

三名恋　みされひぬさ名をふの市宝や恋のつふをる契ふ

湖早秋　さふのおさく浄堂社ふりみ称のまつ風

深夜月　とてもとゞきもせぬ人のおとづれ（こゑ歟）
寄獣恋　ぬるそともん社の引詰おもふそとゝきくせんとゝ大のおもそらゝ
寄忘　竹　風そよ行のそなたゝうつる日の新きつゆ昨の忘い
十四日明望のくもあるへふ
月前萩　そゝかぬ彩もゝゝ社萩のそゝくゝて細き月のゝ
月如鏡　月やもるゝ天秋のむらしけのあうみの新まさるとそ
月似昔　古のゝゝみとゝうるなきゝ人の教ゝもゝ称月かゝ
薄　ほよ出ま称きかゝとゝ社の声ふかゝ宵祇園
寄灯恋　かゝうとやゑ恋ゐるらん姫もえをまゝ清ゝの称ふ
鶴　せよもそえゝおゝるもおのゝゝ鳥ゝおつゝゝもゐのそ社





十三夜同もゝくゝ人ゝ影をゝゝゝ
三日月　まゝゝもゐるなゐ斗ふおもゝ
海邉月　いもゝまやはゝ法ゝよむやなゝ行のそ八月ふゝゐる白浪
舟中月　追風よほふあてまもゝもおゝ恋やゑ波の沖の月ゝ舟（船歟）
山家月　ま法行の中りみのきゝもゝ文ゝゝゝ月のゐ里
叢祠月　水底もみゝゝ川の流ゝほよゐゝゝもゝゝゝ月影
廿日草庵の月次よ
對山待月　そゝゐりよゝそゝゝ月のゝ出来ゐあゝゐる称ゝゝゝのな
海辺見月　夕汐の入ゐる磯よ影もゝくゝみゝくゐほゐる秋のゝ月
月前遠恋　おゝゝゝゝゝゝみやゝゝん月のいるふゝまふゐる里人

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

當坐 原露　まの原風そふくさまほのぐらく世露の白玉

雲收　いまのそらをしうるおもてあらはるる寺あらし世の心所乃の秋

古寺鐘　あらはぬさきのよ物ふる寺あらし世の心所乃の秋

廿三日　思ふ人のこの合よ

秋遠情　ひぐらしの声のもむかしを今を月ぐさん

月前舟　うちより月をのせ八昔よりく星てそ入さまの秋舟

山寺夕　ふもとより風の雨のうちもむくろもむくろもまろぶる

廿四日　ある所よりく一座もちよ

早秋　さやうある夕日させも時雨雲うり八秋を凉しき

嶺月　ふもとより松ある程八出るまもさらぬ月そやそくまさき





秋恨　恋つゝなく声ふかくもむ深れ社のくもて打ぬ袂を

田家　秋の田のあるるのうち小かくてめるうれそ深ふき

廿六日　侍従大夫の家乃月次よ

夕初鳧　天花も翔つゝそくけさをの人のほふ戸やおほらん

終夜覚月　出るより今まく月もみまて秋六月のうらん世まほ

朝帰迂　おそるく今をあふ彩の別路はし

當坐 柳似煙　烟を八本のめみをくかそろみのかゆるち日にそ松る

擣衣　椎実の嵐のせよ（け楽）あまり八こそ深そやろもうつむ

寄月恋　うらこそ月八心ひの始うちるや秋の秋のさを雲を

古寺鐘　乾はる寺も秋の法なら八号くようちそよまさき

廿八日代宮のほとゝぎす講ぜ一光源氏
の物語読後ち井二日結縁やくる夜とくまち
ついくさまく南生百そのこのくまの生一小
三春朝ゆうまを立後る郭公のくみかみむ
遅夏扇なちもとくタ涼やしまをもいかうへの庭のこのやうて
浪間月是そ氏供ものうらみ井法のちを月とめてに花ちおゆ孫
鴛千鳥浦まるくそ陸千のうち斗後ゝ一道のむこうをもうる
近恋いのにおそくよそくるうれの一をそうる人の次めを
釈教悟えぬなそきのりゝ一夜ちうう一秋をちのもゝうよう
九月九日後理たまえの家の月次よ





折紅葉こゝろゆくくの折をつきく勧なくこをのあさ霧
水邊菊露霜のほのこぬまもあさ出くをそ移ふ菜の下み
野亭草なかを(楽十ン)ものやもこそ旅人もくぬを語やふこ速ふん
原露くさくにくまのをおかをそよかつちるあの秋うせ
見恋我そるみるめをかそのの次めも思なさぬ延のくを
山家夕嵐くさ市のこのめ荻ふ折をおろ行や荒ふん
十三日仁和る花物をもこそ市ふ後理たまえ道同
そそゝ附こ千そその後ふのあゝ井ふ
出居秋夕タ雲の杜の思ひそまひ
搗衣驚夢延もなくおもをよのほの浦おて愛をまちよおら



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

岡辺眺望　まくらさ岡のそのなる秋の田のほなみをせてこゆる川波

廿日草庵の月次よ

紅葉　ふるせの河をへだてゝ秋の木をやきつゝ浪

秋時雨　犯もなくそる時雨のふ窓をしきの洗らくる秋

夜灯　ゆめまをきゆをこゝ消る跡の中まもむてふ虫の命を

當座夢後鳥　うきねをぬるみそつるかち枕ちよ出る一のふ名り

寄霧恋　空のゆめなみのうきてたよつきさ行る人のそのそ

関　ふる跡のるまの関屋のふ窓のおと斗しく

廿二日有馬氏邸千鳥元家の記ゝ秋くまるを歌を

さそうく





風告秋　ちゝふもるまぬ抱ふ易さく萩よまつる秋の初せ

暮秋菊　ふそそ雑ふて句ふも月のまつむ菊の宿のさしに

惜別恋　あるさもしるさ易ふ秋ふ別跡

釈教　おのつるふのなるふとふめん我うつさのつるるみの

廿三日思法院のふ会よ

葛　風おそそかつそくふ彩むひなそや世平葛の秋せ

秋　霜杜の風なるまを要ふ神宮のふるうえふ折りるからむ

奮恋　くみるもうき易に紙鳥のともむ文よまる後中の杜風

廿五日紅葉盛よ人ともなくく東山のほうえ

あるそそく美山よ行福るそう道場よくふ十そ

の歌をさぐりてかよみ
早秋　もゝのきさゝめ雲の橋もふかてくるゝ秋の初せ
恨恋　人さそふさもあらなくにうらもみかなからをたえてつゝ
故郷　もむ人もなき秋の古ことなる此菅家の下の通路
懐舊　ふる事ともをふおくりも衣着こむ人やあるき
件の行縢も八幡の秋の比その道場とももうあり
二枕ものも一先もとりて人のそ歌よくよく
ゝく古八月西住房子正慶上座為子に石塔
をまおこたるをいひやりんとてなくなく又
はゝ寺の坊を是ゝ同く一そ経冊ものゝ





たゝもちゐのそのほそ紀のあるそ落そゝ秋のまもた
廿八日上総介の家ゝくる秋もまき材目の袋の下そ
新秋雨　風寒ゝ本をくゝくゝ蔦の二すゝ秋風そ作
手恨恋　いつゝゝ恨ゝまゝるゝゝ
羈中関　羇ゝゝゝ枕をそゝ嵐をゆゝものゝ
十月三日菅法師ゝ
首歌のあるゝを毘沙門堂
人ゝゝめゝゝ中
惜　花ゝゝるゝものあるゝ
寫　月秋のゝゝ千のゝ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

愛 ゑつむ名もちじるくなりぬ
四日山名淳五女教孝播州静澄と法花寺
の一座奥ゐるくしてまゐりぬ
まろまろしき玉をさゝちゝく
初冬風 おとなき秋のそら嵐もちゐぬ宿のそら
雪朝望 あさぼらけものゝをゐらの
尋契 契しもたゝのまふかゝるらんゐきまのそら
寒路鶏 くもまハおそもきおほのしるのをかゝのこれとと
名所鶴 ゐの庵の江ゝをほまゝる秋のゝ波の友をゐるゝく
三日俤 ゐまゝの家乃月次よ





時雨 ゝ浦くふゝゝをかゝなゝ時雨もちぬ深井風
寒草 まぬゝ露ゝ安しまゝ
洲鶴 ゐつなる庭の汀ゝのむ鶴
残菊 ゝゝみなゝかゝく
山雪 みなゝ梢よ裏むほゝふゝゝやゝのゝけつゝ
窓月 露ゝゝおゐハ月の宿をん社も添を射むよゝく
山寺池 ゐゐつるかゝの松ゐるすゐぬゝ汐のあゝの水よ

廿二日ある雨よゝく一清ゝ
落葉 山あゝ家の白ゐませゝ紅ゝゆくゝみちのな
水鳥 ゐ求るみのゝゝゝかゝゝ汐のゝゐも

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

祈恋流るゝのまたのやみぢに迷ひぬる晩鐘を恋絶なく老くハ耳まよふ

十四日草をもふくむ人くさ露をふむ草漸音ふる雨のうるほひをみる牛あるものゝ

閑山月二夜をまつと四月をゆるおもひ(ひ)この秋の月のさよ更

島遠雪芦のまろ屋のうきねの旅風おもひやる

時ゝ見恋おもつ原もる神よかくひそかに千ちをちかひみるめ(藻刈)ゝ

遠村煙そことこゝ流ゝるたつきのうのくるゝ世

十四日飛鳥井中納言雅親卿伊勢八幡法楽

ゝくこゝそつ歌をおくりそへて





萩（太神宮ノ）

かのこゆるまでこゝろ人のうつろふ秋の萩原

神楽おとこゝろ秋のうつろふかぎりかな

無常ゝ風川もゝ葉も流ゝるみの水の清ゝ

草我庵（ハ共）もゝちゝ松のやなぎのうちなびく

鳥タ雲のゝと琴よつまをそ思ふ家鴨のこゑ

釈教くゝそ行こゝのそこゝろおくこゝえあふ事をてゝさむ

十七日夜原國寺宝家卿の歌をとゝ(伝)くゝ

所ゝをもしふ

あかつき人十の夢を十なゝそ八重の道の歌

同日やくゝそうに法のみち中ふ

時雨　そとやもる日影も寒のひもの露
水鳥　氷るよの波もたゝかぬもすまぬそらの山のみね
見恋　思ふまじ恋ぬ人の名をもらしてもめをぬくまでや恨えん
神祇　住よしの神やさくらの花の色の浦へ通ふ道とて
廿日草庵の月次よ
木枯　いつくもみ松なるべき杜そなき木葉や冬の名とかくらん
寒草　花えんとうそふく人もみのうへ枯て末のふるさとの雪
冬恋　思ひたえも果る秋のこゝろ哉ひとり通ふ道
行路雪（當坐）　さやにしもさえ渡る月に風やそふ秋の白雲
欲絶恋　待ころさそふ風のしるべして雲井の庭たえん事を



関屋夕　夕波もさまの山風なそさえて寒かる雁も渡る海風
廿三日恋　法花の会の今日
寒覚時雨　小夜衣ふるく田もまもぬ袖かなそのまの雨
冬田残雁　明ぬくる田もまもぬ袖かなそのまの雨
山家夕嵐　夕嵐あれ〳〵の山やとみをあとをのみ
廿五日恋　お花の端息出秋〳〵さそふもみて
おもふ人不思儀なるまを恋ひ廣き六月の比祇園の
社よ杉清き事あるまを瑞垣ふるまゝて百
首のをかの社よさそふる中ふ
三春　さほ姫のをやまにおそくまもらん

惜花　さくらさかえてちくせ惜む木の本をそふむと杜鳳

河五月雨　水底のくさやさのそまいのみ月のせ

蘇　秋の田のかりほの小萩一面のもとかな

鴈　月夕雲も月をそまま菊を

霰　ふりくる宮に芦葉く柱のそふ雲をこ秋くる

不逢恋　くさくさ八重なこせたのむ木のまのおも

山家　ひ炭(すみ)を安のくさてのみ秋こはまのさしてやくん

十一月四日去八月将軍家よく源氏物語ふくく

まるをしよくくをふくを又よい仕くをを

常座ふくみ仕る中ふ



初春霞　ひさこのかさこの雲もちるもも花のおくき淡せ

尋花　風おくるる雲のまを花うくくふくまもの

卯花似月　雪くなきををとのもの

嶺月　ちのるる山ようくせそくくほのし光の秋のみ月

風前落葉　風をけ家の本葉の中宮よ松をくる

窓烟遠　人くく風そくりもおくくく松の烟よ月八景くく

祝言　松つ八人の浦くぬまな

五日修理なくの家の月次ふ

暁天千鳥　ひくもしの夏の石の数をゆるまをそふりよ鳥の

連峰初雪　かをやの汀の松風よ浪のさをるみ秋のそ川を

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

名所駅路（来ナシ）　そまの浦やそらの色もそれ社の景おもつてふるやまぞそぬ
神楽　そをぬまそそを大もも社一月の申のまへさくやそへん
宮木恋　あ〳〵やまさ三ふ木の名もちぬたくひまつ身を砕く
暁鶏　お坂やのくそそくるもかへさ三軍のそぬさ
八月有明　ふるよく
寒渡霜　そをぬまそる九ま宮そ一杯のそぬをの宮の秋風
宮雲見恋　くる〳〵共ふ八ひし一ひすもおぬをやまよさもも
田家枕　笘むろ窓もそふ猫のゆふそまる共枕のそく
暁立春　十五日日下部家頼　住吉法楽百首の中ふ
くるまのそそまし星をるのあ三へそ雪





朝花　みけ形多かをもむものそふ日ふ出るもその白む
旅夕立　旅さ記もまさ野そる人やそからふ行をよやはぬ空
外山鹿　宮七しふ山そつさ麻そるおそてる屋の独の雲雨
霰残夢　ゆる雨の雲もぬやふ向んを夜おさちみ一挑ふ
偽恋　いつそのある世ともそ恨さもみよあ八かるめそ
廿日草庵の月次　廿日草庵の月次
氷　すそのあのふまそ前却よそもふ詞の星へそ危さ
雪　一まのふさそのほへるもをくをささたる世をつこ心
鳥　くおふんあのさふやそをやるくくる山の声
古寺雪（當坐）　そ和ふやいそのの雪の夜そ屋ぬ花ふねの言を

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

雪の車 道あしくまそとつめる人事にやそちぬ雪のくれ
窓前竹 吳竹のうつさ枝とを切折くえ文をあそ紙のそ我
廿二日 恵法院のお会よ
夜網代 かそそくひのろよ庭やならんえうそそのさ夜
野深雪 我のまをの雪よ油そ雪たそそまの神そうん
恨言恋 夢もみうそ人待の一うよやそ現に移そもあ我そも
廿六日 平等坊円秀月次よ
河上千鳥 里人も坂おうそまくの渡る川そのほうるなそも
山中朝雪 をそめこそ社のおしく我のををめうそ思よりうせ
庭松年久 宮ほうもへうそる松そ庭の苔山うそる杉うつる影を



暁更雞 夢覚ぬ枕ひもかそそる声の後の松ねよ
十二日 恩徳院のお会よ
神樂 かそ神よ大和そのねさそのうる雪夫白くそ
冬梅 ふる雪の木のまより月のそぬよ梅なもくのえの一も
懐旧 いそこそ昔ちやのそうさ夜かるうさ世の雪よみそん
十六日 平等坊円秀月次よ
冬天象 はのるそくむそこひうそ新やる月よ夜るそのの白雪
冬地儀 宮ほうもう出湯とみるやえ川のまれるみの橋かも
冬人事 なりけ世の昔のまのそれも似ななそそかそる人の住て
冬暁 明るまて初ぬものそその国のそを月もおそ出そもるとそる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

山雪　そそるみかさる谷の鈴に出よやて土の流江こおろ
冬通書意　ころよろう世ハみなて行そる深のあのそはの表ハ
海邉冬　雪をへく杉よ汐風さやて日の海のおりてハさ身もをし
十七日草庵ふ人くまくまくまる二サそ申ふ
見細代　水底の空をてしくおろう細代の布よやとる月影
古屋霰　表安そあ〳〵空のをとまれのやのちき彩つ市松のあ
宮心中恵　昔よハおりくなさそやおろるらん恵さる人ふ近つそ
杜河筏　山のやろさまふらさふ人もみえぬ筏そひろ旅る
廿日草庵の月次よ
暁寒月　乙川乳ふめろる月のこに氷やさるさゆるゆ、ろ





篠霜　猿さよろさへさむし篠のそのふ山の雪ふ嵐ん松ハ
恵　枕　なさ名をハさアーさ空よさおさて枕よ景るちのふせ
田庵　秋ろよふ田ろる人ろもふ宿てとぬ夢もまこり
廿八日或人亭庵法楽ろく百そまめふ
初春　つさ法るる日ろみなも附そろてふろふる
花　あろそよものまむのようふろるふんへのさめ
郭公　さつさやさ麦（うも類）の杜風掃のろそ杜よるろさ
萩　荻系や秋々そ杜風のふ
雪　玉ろその道の教々をもんさそ八をむるて言ゆる（つれる類）
不逢恋　ころなんは世の内ハ契なさそもふなもふ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

松　たるかりそくる年の小松我
　　廿九日原にてもちよ神のおそハ
初春霞　霞よそくるものゝそまに
搗　衣　（冬類）　うつ里のこゑのうちそやそ
爐　火　もえぬそのありともみそ
窓篠恋　うそふもなきさゝしかな桃ものそ
旅　宿　我やりたるもの嵐ふるそ
　　十二月二日或所會
積雪類　深　雪　松杉のとおしまに埋そ
惜別恋　ゑもさそ同もかそ



春漸近　せそふるさまのそそえの梅枝
冬述懐　（雑上）　ふりそそつもりそそ思ふる
海邊雪　山をはむそのやふさ
杜神樂　歌ひやそのの社の里
窓冬衣　浦り社の氷をあつさ
旅泊煙　むあその杜の烟をみあ
　　廿四日薛原氏資そ名
雪中望　いつまもそもかそんをそこのみの空の西ふ
窓恋絶　まそのふもむ袴もあを恨のそ
田家夕雲　消やくいなそかそ田のそまそ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

かゝる上徒々の家のまつ
氷鳥多　多枯の山の嵐さそ
待不堪　待人の有よりくかな
田家鳥　雲まより刈田のくろの
雲低ま
七十ふあまるまでひ

康正二年正月朔日試筆
春　天久万のとそゑるハたてく
春　地達みてしたのあ
述懐　おくくの抱ふみ

二日の夕の月二日月
源氏のうちのまきの
をもんめるまく
ゆるもうも
九日まくあるまく

詠そせる

もぬくつつもりの今日二日の月そうく霞める

十とる草花もよくく読なみそしる

霞初聲　九そのこの春も詰人もくさたなひくやものさぬらん

春　雨　新日さひくそもそもそく吹風よ少年まてく春雨

不見恋　みるあさかなそちの宮やはそそいおしもる秋そ暮ぬる

朝　おくるをもめし学くうきそおそるる秋つと

十七日右兵衛佐の家のそ始う

三　春。氷楽　この日をとそし氷も日のうちくく解ゆくそ

忍　恋　みそやもしのふめそうちくく袖を深も暮さく





浦舟　つの浦やまつもそうの母のかもうかくる波のさえはてむ

十八日隆宗法印をそんなくく読なみそしる

水邉柳　氷楽の宮そうの孫もまそみそ一本

隠　恋　なりまそみそ人な更かそぬのうちよ泣縄そこのうく

寂覚遠情　そめいろ共この白西めそうほにしくの呆もぬよりそ

羇　旅　かそりもそまるも松そそめる宿の床の九森

廿日草庵の月次よ

鶴伴仙齢　仙人のそ飼のそや老さむ

初　春　当座　春　坊まのそ共なそさの新宮姫なそやのうみそむそま

折数冬　おそさんそいそぬのそ花八千ありそやくのうみ

寄山恋　まつてふのそで恋めやほのぼのしゆふ山のとをもる
社頭榊　ゆふ花めてる月日もゆたなきをもつ岩根の榊葉の永
廿一日冷泉侍従改為家よくとまつよ
残雪　浦ふのまつよりほのく雪を汐る
恨　浦ふやうき当もまつよりいそ汐のかくいもぬ袖よりぬる
祝　十かつのもや匂ん口つの浦の二葉の松のもものそのそ
廿二日恩徳院のみ合ゝ
閑霞（路美）　幕やまのむさしの雪を惜ふあふその夕せ
松残雪（雪消松緑美）　らくくりもの雪も花葉もちつらまるき窓の松陰
社頭水　まつよりもちなき神の告をうけをれをこの松の

廿八日平等坊円秀月次ゝ
霞隔樹　あまとみ一松秋なくゝもゝとれまあの清るこのゝの
霞（當坐）　鳥のこゑあめるゆのもる羽いおもむれいふのそ
恨絶恵　なくしゑなき宿のそせくよかなやまかるくら
市　坂ゝあの田面のいねをくゝ妻こめや秋の市人（うち歟）
夢　ゆめとハ現も夢も夏の内まき秋くゝ斗そ
廿九日雨吹ゝく一読あるゝ
早春　もゝ千やあの光ゝてり山ゝのまるの秋せ
遊絲　世のかくゝあるなゝうせ好をもるものゝ（ゆふ歟）
逢恵　ま抱ゝ我ゝとかゝ一ゝおゝにむゝゝ社そぬまもる



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

夕　野もその原くさも冬枯の訪のもも草六月ふぢ衣きる

二月三日經系坊にて

初　春　掛まくもあやにくすしき神なれや春日の里にかくも座ます天の香山

暮　春　行かふ春のまさきくとふ人のまさきくとふ座月の影そおもかる

被忘恋（十七集）　なげきをも救やまちらん忘貝ひろひなき磯もとくくんとも

水郷夜風　柱のその嵐もものいはぬ人やその里人

七日草　七日草もよ人に来ぬ

初　春　春きぬと浦ちの浦さやまちらん光のどるめいまあこ秋て

祈　恋　いのりよへよし合のまつとハ狩とそ祝のる本の社ホ

羇　旅　あさひもるさき民のかまと山烟とそそれともそる





廿日草　七日の月次よ

花　稍　白雲に桜をこりやさうにも乃咲なるらん

春　田　すきまやあさき牛の沖ころも春の山岡

神　祇（十七集）　我神の我名とせハ八幡山あまつさへやをとハたつ

夕　花（當座）　花ざくらやふみやくにあむものそや

潟　花　もまなる汐干のうみ夕汐よ遥そ狗をぬ花やそらん

花　色　稍くうつろひ果し桜も又そふる座乃もそる芳

廿三日恩徳院のお入会よ

花　雲　ぬも山毎秘蔵やとさくもひのそのそ路よみるらもほ

月前花　せそそものもよかそそ名月の座よ義里人の神のせをん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

惜　花　ものもはなやかに別ていとよう花の話乃らせ
廿四日右馬次の家にて人〻詩をつくる
あるじ中ふ
餘寒氷　字
雨中花　咲ものもの衣も社をぬ次乃あめ
忘　亦　ものうきもんとおもふ
廿八日平等坊会秀月次よ
野遊絲　風
閑居花　咲くもちる花の日数の経斗宿をともくもちよもつ
古渡舟　沖こぎ渡のおもよの酒くせとこ舟のつ


當坐
客花雲　咲のこる山の一木の桜もいそうそうとをかくん
客花待亦　松のそのいくよをつまそをもやたのめんこるん
客花古寺　そのまてこるめもはしもの花人のこゝろを夜やる
廿九日草庵にて人〻まつ
江上花　岸よりの舟のみなと住むもの浪をあらふ白波
園中花　そそゆる洞のこゝろも行川の橋のおなるもその花
客神祇花　老ぬるおいこゝろんたゝる神前のもの花のさく未
三月朔日修理大夫の屋
一流ふ二十ふ中ふ
山中花　社なくて風まこゝろもよ平のこゝろめる



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

暁鐘　まちそや寺といくの鐘そともぬ秋そしらる

閑雨　まき山の滝のしらきもそのしら雨とやもる

二日仁和のてらをみめくりて

なくもちるなとなるも本寺後の庭のまの井の

まつ〳〵大なる八重桜一本風のうてなもそやさう

ふみそ侍りける

吹おろせ行のそのまの花の本寺へ叶る将軍家成そて

三日まの山若き寺へ詣ふ誘ひくる谷よりうつる侍る

くもりくまなかりしかはるまてふ

ーもやなくそ雪るくおれのもそくふの





みそーそこの侍従舟をもーく一そ（と業）のほるみそーふ

そもさうる次もむもんくおそろふるをそいる

そ山ふるそ若き寺の花ふ侍るふ京のくるもひあ

ひくきのふねをおの馬に緑なる語るーのそふ

人の収従舟をそーひなるみふくく

字るもるきのふの花のそのの匂を梅に袂もか

そ社のそ花頂ふなるそくく霊山り福寺と

り通塲るくくく一渡あるーふ

遠尋花　唐ものうやそもし社つ西行を春の暮ふ

旅店花　本の後ふなるそ花延くおるそそのこせ

宴の花忍歌　見つるそよ生ても人とう花ものいそぬかやうまん
宴花懐旧　我なくいもやあるぬとなを云んもやむしの名おる花
宴花釈教　くも学よ仏くやさんん法のしの一むみを悟を
四日桂厚喝食をそめしそ
花盛　おく咲るまの桜りまのさらん花をそそ
忍恋　忍ふ見いやもねのうもとや添まもの夢さつく村る
釈教　をなつおく法のくをさ云へそぬそやそよのるまん
五日売実法橋をそめしそ
初春雪　くるもの花そみそぬもまるふ春むかそ
扨蓙　もるそ挽やゆくりり杉の見いのうををふん



宴苔恋　ひせるく保おさし切もん苔のしもよ菅もこそあれ
泊煙　くる毎よをおそ保やむしぬの杉の烟もれてもん
九日鴨部之基與　秋のるひのきおこみしよ　中に二本
霞障村　ひそくく宿とかくもむこ春人の社のもるうせ
賞桃　よくもひハタのけまさぬ種もひこよせの杭そのも　そ二本
春遇恋　ひもも私のもそやつつもん人のくのそのま杭
春絶恋　おくそくる日新よそ手をの花すひ人のまのちうを　しゆ楽
春山家　待きぬもつそのつのお桜ちるを落ぬをやれむ
十二日宮道親忠家好会　中一本
ありよみ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

山朝霞　名あよ大内山のまきをやそのまも清なそ引らむ
　造内裡の急をしるなしもちきおくく
　詠也
夜時雨　桃より時る出くや里あの人の袂そ
稀逢恋　たのめ昔の秋ふ平なるくそよ来のみるこのさ
名呼鶴　つのさ共を友鳴のもむ夜をくよ式の松陰
十四日　細川阿波守頼久の家よ読ふみて
霞知春　めくりのはるもまもよくひくそかなるこ秋のこそ雪
恋　涙　紅よ門や浪の江の内女うま浪のそのこをそそそうさ
鬻中憶都　日よ降るとひのそをそをみよみのそあ了の秋
そ推



十五日　妙りる住持室蘭修理大夫をそうく一読
　あそしゆふ
梅香留袖　梅もさくやなふそのあま夜をたなし社る句ふ浦風
宮の塵恋　あそなさ枕のちそのふる色のふうせそを拝ひく
山家松嵐　よやふそはそのふの松の風うさもそやのもそ住ふ
十八日　修理なまの家よ読ふみて
関路霞　もくふもの義のもをおくや八十宮そる四方の旅人
恨身恋　とよその逆のちさそそ社の法をう風そ夜まそ
谷　松　三四のもも秋せやゆさくん宮の谷の松ろろせ
古　寺　三国へくりそうそ学のさのを四代のそをそる

十九日洛ニ至ル客人ニ逢ヒ其ノ
マヽ伴ヒ奉リ東ニ下ル道ニテ読ミ侍リケル
初春　かも山やわし尾の杣たてるいまの事あり
躑躅　いそなよ折つゝ旅の袂よりるの山路かな
帰思　うかりみし人の跡をば尋ねよ
関路　社ほゝぬ名をたゝえの神風や関もとゞめぬ人
廿日草庵月次
山残鶯　あまさかる鄙の常なる老いもの、ら語
深暮春　霞もしみ春の小舟こぎ帰る
懇切恋　人やとし社雲ゐんとて祖を
（裏）

當坐
春雪消　もゝなる日影ともふちる雪の跡のこつる
宮河恋　打よりそ川のを清たきつのまのもるゝ
旅宿夢　あだの枕うこう（異本）ふきほしつる磯のそよ
廿三日恩徳院のお合
蛙　池ふかのまもりのみなく蛙風
残春少　ふる山ぶの一のをの名残をなく
羇中恋　旅のそぬくなのそかつそ
廿四日細川右京大夫勝元家の月次
早春天　出る日もえもまさくつの天の人をもるし
更衣　おそ桜ほる匂ひをさそひつる夜ふを風そ





国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

秋田一ゝふ雲もそなむ〳〵社の田のさの子の風のそむそうて
尋歩ゝいの稀人門のそゝゝの空井泊そぬゝひや汲もそるらん
神祇まゝをしちゝをそゝひく宮ゝやそゝふみそゝん日とやなん

まる水七日将軍家神く八幡宮参詣あるゝき
うかく詠也

廿六日平等坊田秀月次よ

田蛙おゝたゝちく田ゝこのあゝとなゝ水の娃のゝゝをゝ
春不留雲ゝ行ゝ春の紐ゝもゝたゝゝ去の衣そまふもかゝら〳〵
意秋うゝもゝをつゝひつゝまて折ゝまゝ流斗のせゝき挟そ
連(當坐)峯霞おゝもゝのゝゝふあゝ〳〵の谷ゝ(よ奏)ひをゝも春のそゝけつゝむ





江春雨江のゝ水のゝゝそ紅よふるを出く松をゝむる春雨
窓思艸恋ゝ松とゝぬをゝ乱ゝ布の葵衣ゝまそ〳〵悔そ春のやゝ系
幕中書ゝ松の道ゝをゝまゝのゝゝふゝ出てゝかゝふぬ日ゝむゝゝ汲

廿九日八幡先社務平等王院立清ゝめて
草ゝ尾ゝまゝゝ昔のゝゝゝ出ゝゝ待ゝふゝ
ゝ折ゝ

まゝの松ゝひゝゝゝゝゝる思ゝのゝつゝる君ゝあゝて
俊立清ハ先祖更信の祝又ゝゝ事なゝゝ也
おゝゝ

新ゝのゝゝの今ゝのあゝゝゝゝゝゝあゝぬゝる君ゝ姥ゝ

晦日鴨部之基
立春　法楽百首
藤　花のつかまく多くあむまそけ小風（名類）
五月雨　もれまくふることそんの立月の霸
擣衣　ころもくうつもやさとんろ川きの霸のさ衣
水鳥　話のそのをだちてら（ナシ本）ものあう
寄猪恋　我そるへのうのふ猪をもむのうひを
山家　ふるぬりやそのうき世の霸まるらん
周防国より大内たま教江好く状をおくる
西方祝言

（そ柏）



安道事下加連訓事なとおくらる
至極の老屋なりむその一みそくハ障生則ちの
さそしけ屋ハさあひのうつことをうひる
たまる
某時のまつもいそ
むつとこれそくく續後撰集なつそく
ささや杜鳥ふをまむーくまつよをんまなる屋
四月四日右京まの家のさに
首夏朝くの公もをくこのうる夫時夜のう風そ（世類）
寄鳥恋　鳴るおそよおのうのことそ名そかるせも

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

故郷木 ゝゑさしわも嵐とやとひん狩倉拵 ゝあて
五日御祝なまへの家社月次よ
山首夏 ゝゑまゝう入ゝ人のゑ衣ゝひゝやおゑるゝあなるらむ
互思恵 あゝぬゝをゝ山深乃ゝうゝやゝぬゝてゝん
忘前行 ゝの月ゝまつゝゝゝゝ行の一ゝあゝゝゝる旅を
待郭公 ゝゝ雨のゝゝまゝぬゝもゑ山のゝゝゝ
家木恵 名ゝ川あゝゝゝ ゝはゝのせんゝのゝゝの堤本
神祇 ゝ人もゝゝゝむ雨の日を神やまつゝんかゝゝゝ堤
七日右馬頭家ゝゝは ゝ楽ゝゝく ゝをおゝ升ふ
遠山花 詠やるほゝもゝゝのゝ桜おゝんまゝちやゝるゝゝ





行路市 ゝのゝゝゝゝ

述懐 老果ぬいそうへまゝにうんはまぬ身のみよいそふ

十八日薛原久芳ゆかりの人めぐみもてなすも清る（そゝの誤）井のもる夏かな

林早夏 新そうへするの人めぐみもてなすも清る（そゝの誤）井のもる夏かな

鵜舟廻嶋 めくるも苔ふかし一樹の小島の夕の景

恨思 名をおもきのち學の業もやゝ狭のゆうそみんな

夜過閑路 よひの雨通ふそさゝ舟のうる山そ旅人そいり

廿日草堂の月次よ

船路卯花 まり川やうら（う誤）小舟こぐ岸うつ白波卯の花

薄暮郭公 ほとゝぎすなきよ新鳥詠やるうら波ふかき夕暮

古寺殘月 荻ふやふきまよひるうら波ふかき夕暮

（當座）餘花似春 夏山のもゝそくさおくれ咲うら波へくもちをやとせるその花

客書思 紅の涙をそめくもる雲村そやくもむみくさの花

白鷺飛 雨くらき山本かけ人を渡るひとりそよのくるうら

廿三日恵源院の会よ

雲外郭公 をち方ゝほとゝぎすいつのそふ羽と休むらん（十二本）

夏月易明 天のとをたゝくる鶏の二あまりて夜のあけやすき

雨中懐旧 まこと哉ふかくやおくるらんふるさとの雨のふるさとの

廿四日平頼資をとめしーふ（かの仲は一本）

郭公遍 くいなのまこ里へももしかなる人のほとゝぎす

羇中 そるらんうの鳥の跡をハ名取川よこ河通の旅人



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

懐旧涙　せきとめぬ袖よりあまる雫かな

五月四日右京大夫の家の月次よ

夕霞　人の世のくもる袂をよそながらはるるまもなかりけるかな

短夜月　ながめこしかたの空をかたらひてあかしもはてぬ夏の夜の月

忍涙恋　かきくらし袖にくだくる涙こそ枕にかかる雨と知らるれ

深夜灯　いくよ経ぬ涙の玉のかずかずに数ふる袖のうらぞくちぬる

（ナシ一本）

名月五日修理大夫家の月次よ

菖蒲　あやめ草かるる月日のもとゐやそのいろいろの数の数

鶏　河鳥の名もおそろしやもろともにあらふもくるる浅瀬かな

嶺雲　そらにまがふ（き歟）みねの雲のおもかげをうつすみぎはの水の底をゆくるる

（そ抹）



當座

夕春雨　花ちらすなごりをしたる雨のうちにむるる

暁郭公　詠めたるきぬぎぬの袖よりもなくこゑをのこすらむ

見夢恋　名もそこもまだしらぬ浦のみるめかな（く歟）

旅行暮　ぬきすてむ袖ぞ露けき旅衣かさねてかたしそらもゆふべの

八日阿波守の家よくよく読経のあるに

首夏郭公　あやたしな月のくまのみ山にて松にいくこゑのぬ郭公

寄風恋　人ならばなびきぬべき風のとをぬまにうつるそでの香

泊烟　おきかへるあまの袖とや浦風毎にくゆりかくれ

十二日平頼資朝臣家にて読経の後

林間樗　折ふしも花のちるべき梢かな



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

夜戞枝　又る木のささきり子人乃折ほちふかき秋風
宮の布ゑ　いまてきその庭そをさをあきむもま多の澤を行そん（そ類）
廿日草　庭の月次よ
早苗　田事なる社の古仁紙おとるま（に類）苗そ洗
五月雨　おちみるやまよかきそ乃（主一本）ふ月雨の
誓　ゑたのめくもたよ庭そ
落花（當座）　空なるまての桜ちりの世よまよみ嵐そやむ甘もき
寒草　ゑるもまの雪のはちふやみれくるはちふのふ
厭　ゑ秋そきき月よ鈴そむるもあそしむおと人もくやや
田里　かきほ仁稲葉をそきゑ門田の稚の村風



橋　風　人ゑぬ昔の風のつゑひふ社のこもるさやとめこちも
凝　ゑ　名まきこひやや（の類）宮の澤や新ふ行人のみやこまよみん
暮　山　ふひ入くのそもそ玉こ仁ささるなるもこてそ
雨後蛍　ふそほ玉なくのもむのかそいろもそてあほ掛よの
返事増ゑ　ちくきのふ一の風ふるのそのなひくをみくも社そぬ経ふ
残月越関（類ナシ）　おねやら宿の月のみよまよそれる寄乃そ人
橋帰鳥（當座）　ゑ乃又ささしと唐の稲ふさてみをつく
濱千鳥　花ちる社ふくの渓ふる波をさそるおそそつろよ
宮の擔ゑ　ふまてあよつしとそ波をそのみもそも星る澤をそる

麓 紫 おなじみちのくの紫から作りをそそる

六月四日右京大夫の家の月次よ

蟄中蚕 もろもろくさよりも鳥のまゆ（七葉二本）

室の秋草 ゑもそそ秋のようなものもんさ れやささや詠つのみせ

十二日平敦盛資経兄弟一連詠つ

夏 雨 おもふ一夜のふるまの朝もあめりまるもるる庭き

夏 扇 ふる葉ささ団甲の秋のそ緑うそ夢よそそ学ふ

夏 竹 六月のその夏の扇（一本と）もだそのそのほくまり

夏 急 急ひつふやの泉そはみよぬるき当まる れ

廿日草庵の月次よ

（末カ）



水上蛍 水るの流のさ孫もくらかさ氏堂屋の席生

晩風涼 もさみやささ沢ちさ芽る風夕つそ川流も

幽径苦（葉カ）日堂う助来堤来そえぬるふのせのむろよそん

卯花（當坐） 神もの和杜さし杜もを一夜の垣うよそるむ

窓の鴿忠 鳥もくゑよ忌ひのせめさてもをせむるや和よいるん（ゆふなく 葉一本）

短夢 さぬる来のさ一さ多のたひうそえるもれ沢とておき

廿三日恩徳院のお会よ

遠夕立 おさくハ夕立（すこし）涼一流るるみそてる川上乃め

閨中扇 七まの月のゆうよふのあまさをの和やの一むち

山路橋 山なるせ住るとこ杜やまのふ川の井ある橋



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

七月四日右京大夫の家のうた
秋田　おそくとき稲のいなむらのむ雲氏のくやもそまもむ
別無書　ふ後の神よかくしを作くく法こぬすの事の夕浪
浦松風（ナミ漢）　風をるくさのうち和歌ここくふよ清をぬ跳乃蛙
五日右馬次家
水辺初秋　なまそくのうそやいつこ川岸の一まそまくまーてる
宮の秋地　多を村のんまそよそくかをり和歌生のまの土てあるも
妹懐旧　志くまぬ昔の村よぞぬふ法もふくき神やそうくん
七夕後朝　七夕後朝ちまくの家くく七十そその法ふ村ふ
七夕幣　流くの早もの春の早もまく祝もそぬ大井川なみ





宮延忠　板屋なむく幣のふな延喜あくても注をまつくむ
閑中燈　友もあそ池ハつきくそそこ一国そ和原き村の蛙大
遠村竹　呉行のなひくたひやふ法むらんをまの山のまくの里人
廿日草庵の月次
早秋　庵き世のまのそと毎あよ一まつもりてそ村の祝風
秋田鹿　麻もこひをふ法も絶ぬをくまるひさ田そ秋の雲
宮秋夜忠　己ひあるむくくの宮の村の月新くくをふさ心ちりて
蓋近枕（當座）　くき村の涙るとも秋のもつふさもくふく
絶忠　狩のくまりのそ系の七星くとの数八もくたそまさ
洞（谷実）　水谷川のもくくなぬ拙まよせもくふのくくさる

廿六日上総みの家よ漾ふまて一ト
初春霞　ふるさとの裏の月のあはれやもるゝ業ものあやあるころもあるらん
時雨過　ふもと狩る家をそらふ木枯やそうるらん
神社　道ある神のあまつ信よりの杉をかりもよ

八月三日友まちたまへの家の月次そよ
上弦月　ふそう月のかそうる梓弓入江沿こひをそうせ
終夜月　かそうをかそうを呼そ集んやふそも月もまそあるかそうるそ
月似心　そ玉ふる時そそみそうそ人あのんや月の姿なそうるらん

七月分　七日思法度のお合よ
薄　風　太ふおつるふそやそうのそう妙の落杜風そ



秋夕　うそ叶そもる人そうやまれおんそうり世の秋の名雪
忘恋　そうの名を忘れそうそうやそうしをそそうふせ

十日山名大蔵大輔之朝草尾よまそよ
初秋風　天女ふりやも琴牡鹿のしくそうまも山のまの
忍待恋　ふなそ風そやたそ引そ行そ思おくさの妻そを
田家鳥　民のおそかひおく杜の馬牛もおふおそるよあぬなさ

十三日御理なまの家の月次よ
暁連虫　よそこあて夜のもきを拓ふやそうそ侘るあるらん
月催恋　たのふまふ別路そそくふ入月ふちふるよそる
羇旅遠　ふそう海そうる九日おいもあれふもあそうそのふ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

當坐
未出月　待出月の光なくやもこのあるさに句ふてそ

月下荻　風ふきをよおとづれぬつゆや忍月あはれのをき原

月前猿　猿さけぶこゑの月のかげ風よみ深てくる夜枕のそら

山家月　深そ狂もかそふ山家哉月乃あそれ

廿日平等坊円秀月次よ

七月分
荻　風　荻のはの風をおとにたてて日毎よ秋のあそはをしる

夜虫　出ぬまてそなく當(のむ類)よ草くなく虫のまつよ松虫やさゑん

當坐
釈教　山ふかみ苔の衣のうすきをそ嵐のあ

秋田　ふるさとの庵もうらふ新ゆをつみもきて秋の小山田

紅葉　夕嵐そなを深きふもとの村をそ紅葉のあみち葉





障　忠　ふもとの滝のしらたまそちる

海　海人もいさこゝろもしらむ山ふかくも世をそみてるゝ(十二本)

廿三日草庵にて人々に別る祇園法楽百首

首當座

立春風　ふくそまき三笠のさ風よ松なるみやをさゝるらむ

雲間花　乙津風よそひをそふくかをこそまのそや梅なるらん

夕立　引ふる棚の板屋もとゝろくやうつるあまそ夕立の風

暮山鹿　おの毛ふ消り呼をもつゝそ夕の秋の雁やるら雨

月似氷　ふもとの雨や月よ氷をおなふる村そ人も弱ひつゝ

落葉深　山里ふるまの葛のかゝろ人もをも教そみゝそもり

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

馴恵　雪毎朝ふりしきて俗を塵ことに忘れ
閑路鶏　あるときゆふ暮をまつ程もなくおぼつかなき
廿七日恵法　法のともしび今宵
月前雁　秋のそらも秋ふけまさる風の月の雁ぶねこぐ
月下擣衣　さえのふるもしるし(そ歟一本)秋ごろもうつ声や衣の月ぬるる(みさと歟)
月似古　やとを独ふせぬる人の侭もうつみまさる月乃涙を
廿八日草庵の月次
初鴈　秋そのりのはつ声蔦まさつ山もそよまく虫
河月　引ものくれなゐおもかげの川波
古松　松ふよまさるぬしひのおにそなたひよ

（芳林）



嶺鹿　世のうんまでの岩の庵のまに夕やこめまをのの子人
海鳧　いそこそ尽るつらはよおきてそ延のさまも
絶後恵　法ふ公のうき物まねぬりこう川もなこ庵の上
江上鷺　さのふる江川のあのもう津をなうこるる跡の一ツ
同日八幡夜坊　ふの情まに八京のおのもこ兒
らんこ中よ
有注
江天暮雪　そのふこくせる雪の話ふこをよねようえこそみ跡
同夕山名修理大夫入道宗縁の子息与次郎政清
もめこふ尾おそうこあつるふ短冊
くようそ姉ふこをるんをせつのふ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

秋一

くさ〳〵ハつの浦風吹そ〳〵て老の涙をもよほす斗り

廿九日平野雪資をもとめらるゝ（小二本）

浅茅月　袁をもみそらめやと人の杜のくちもとの月

窓秋旅恋　訓をのきさゝ夜指よきぬ〳〵てそむこのみせ

往事渺茫　うてもこゑこゑもさ枕ぬる古人のつゝぬるそ乱旅記

九月二日そゝ指梅黄ふつゝ人ゑ伝ふ十三

秋平頼資三十そ

もゝさゝ俗つゝに訓なるよみそ書そる

月前風　ちよひ世よ袁くそおほそ名そ袁そ出る風の声

手相

廿日草庵の月次ふなくみこと人こゝろ

〳〵ゑいなひのこゝろくく

露染山葉　秋山のこゑ袁この露の二染るをなこ四才のみもと

野草欲枯　又やゑ〳〵の杜もりのねをのよまのこまの杜のまゑ六

窓海人恋　うみの孫あよのさそをつ活よ消ぬもつ〳〵仲つ名津

當坐

秋　田　田中なる民の尽玉六袖のめつ以袂て袁をまる阿のゑ

秋見恋　やつゝ川本業ふ月をほのこう乃京

秋述懐　杜りもそ〳〵秋のを風ふをまるものあをあつて

廿二日草庵仮倚中玉ふ高市代

のあ佐の市刹かいそ〳〵人こ住せうるをそ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

霞春衣　この社七日もさらむ衣ほせるものかく
故郷露　宿さなき住ん人のいおく露やはらにふるつゆの程へ
神樂　白妙の袖さそふ夜のそら衣うつるも
松作友　祖(く楽)も我老のまつまひおのえをのそむ衣ぬぐ
十月三日海程なまの家の月次の俤一ちよ
みてふるみてく海そらはるふ又ふゆさらしぬる
初時雨　神な月々のおとさそみるめと秋もふかき初時雨
江残鴈　流江の芦のうもろさつさぬさを雲翔ものかる声も
樵路夕　ぬさつやさき山姥のかくるらんそまるさの夕せその雪



當坐
時雨　松風のかるハすのあるまてみてく家のやふ漏さぬ
宿草　宿草も村荒ぬさと妹こまて秋よかりけくなるゆふへの雲ふ
嶺雲　なこゆるさまもつめのさふるんとる伴助の家のてふ
十四日俤の入道浄元月次をしくなるをしくを
再興　再興とく情感をいてゆをもゆなるら
詠さまあるしよひくいおひくくまてる
落葉深　みちやつるる木葉のさなくふ庭にるさをやふんん
暁寒月　乞海せさふ氷をみさてあつさまる月を
宿國祝　さうともかな神をそまふくはるのあんひの大和のそ
木枯　いつくふみさりるらん万葉のやうあれり木枯の風

別　恋　夜の座のさゝ砂をふむ皆もさゝと碎くゝそ
故　郷　夜よりやさゝてもあるさゝ拍子(り歟)のあるのゝおしよ〳〵幸ゝの神そ
　廿日草　竜の月次ふ〳〵まゝ〳〵
暮天霜　り月もゝ〳〵まもろさゝ敷のさゝやたゝる霜のかゝ橋
渡(歟)湊千鳥　湊もの〳〵のゝやゝまゝ〳〵つまり友(もゝ歟)よゝるゝも
名所市　つれもかゝ人やなさゝ住吉の渡辺の市のたのそゝめそ
當坐雪中炉火　さゝそゝりおゝ火のうゝのもゝ炭ふゝんをの海さゝめもゝ
寄松恋　月なゝ人ゝいそゝ松のその苔のゝれゝ嵐ふゝ松を
薄暮嵐　ゝまゝるお宮まを我とゆゝせゝゝゝのそゝゝも嵐ふ
廿二日恵信院のお合彼院を依遠俗事ゝ唐





九月ゟ
秋時雨　神ゝふるゝゝゝ昔の彩のゝるゝ行秋をゝふ時雨ふ
遠樹紅葉(ナシ本)　ゟゝまのゝそゝ紅葉をゝ出るゝの浪波の嵐のまゝ花
寄鳴恋　ゝ代ゝまゝゝゝゝをかつゝん宮のゝ紀をゝ出るゝ入
或人の月次をもしめし
遠俗をおゝくゝ待る
落葉風　つゝ人風ゝ流ゝもみちゝゝ敷ゝの海川のゝゝ
霜夜月　月ゝゝ昔のゝまのゝゝ不宿ゝゝゝ生所の新
社頭祝　住ゝやゝ松の巻(ろ歟)ゝゝ幸ゝのゝそ
當坐祝　冬　嵐ふゝ松のまゝふゝもゝ海をゝもゝの松ゝゝゝ

誓　哉船川社のしめをく神のしるしを今の洞にかくる世そ幾
羈旅　詠なひちて人にうもんのるゐもんのるゐ風
十一日（月一本）ある〻ふるく一清あるもみ
霞知春　雪拂ふ谷の鴬なきまちそ雪ともまちそ山〻
浅茅露　雲そそくその野そ露も消ぬを君むはちすの雫
紫霞　霞〻ゐ谷の松のしめとかくる〻ふ
別哉　唱そそきおくる〻別の庭つるなをも梢の事とゐるよふ
遠樹鶏　月をへだてゝみやこやるのとの一の里乃松そおけり（ゑ二本）
五日後宿　五日後宿たまへの家の月次
寒　月影さえ月のあるみもりもやむまよのもの霜のふるの





氷上雪　ふるまにうふきまとやゐるらんをとさゝふく山川のふこと
遠（當坐）　哉　おもはよ哉るんのやつきりらん道のをその軍る
細代雨　川風よりあろをうつるのくとき敷屋床うる人も陸
窓菅哉　うき敷をんつとまのを遅なのおよたちの杜のせ
遣水　高やいうきう中まもんをハやりみのある妻なうを
十二日ある〻ふるく一座あるもみ
春雨　ふりしそ花の移うる句ふ面敷のふるみ
垣葛　垣よまた芒の衣のうふきまとやゐるのまる蔦葉
池氷（楽ナレ）　もみもの浪のふをちこのうこるふ弘
顕哉　あひ（し楽）あのはなるおのそふ鴛をもうさ弘る



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

海路 ちぢ法のめるさ孫人の宮ちあらかみりそうう母人

十二日平敦盛もそ多 一続きの中に

夕落葉 嵐吹き移の入日の詠さそくタまるもそうる本宮ふら

向炉火 くまりくいをそいくよおそ

忍逢恋 拾ひおくおそをるもそ

旅宿暁 もそいくや胡多(之类)きまんおてのそそにし多を宿みそめハ

十四日恩徳院お合そ

十月ふ

木枯 うき世よ多をかくおくそ人をあんおあそ山のふ枯

寒草 もそみをそそをみのそいふ及そしお詠なそそおの社のト詠

夜燈 かくおハ消めやまみまさるらん後のそ宮よかくる蛸

そ枯



大舘兵庫頭教氏兄治部少輔 [redacted] 七年忌第八

一遍をそめらおそ七まの多共詠そみそうふ

初冬 法よ八雲をかくそ

朝雲 くれもみよのあそなくぬまの(よ一本)やそ松一山のそそそ(うつミ类)を

釈教 悟をもそくる法の座の松つたる枝を多和花

廿日草竜の月次よ

氷閉細流 引板よ氷そめくる谷川やそむの井山掌そ作ーも

雪中遊真 くまもくる雪をのそのの名引けをもを並べたる山ま

恨不言 うそ出るいそのをハ延そのもまる波やそそ

梅(當坐) 花 木のまうう社かる月まのまそそのふそそのお枯せ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

深雪　雪ふりつゝく猶るゝ松そよ浪そたゝをの人のうらもまつ
逢（會一本）恋　来ぬ海もすさまじき冬の雪なれや
釈教　なほ猶もいとゝいけるおもてをそうる（う楽）
廿二日恩徳院のきう会又かの寺にて
なをなをくかたをしつゝ
舟中雪（船楽一本）　ふりつゝるそのもろ〳〵の白妙の
袖氷重夜　ぬれてうき浪その袖なれやとよ
薄暮雲　なをなをにつゝめる雪もうき雲の
廿二日平敷屋にて読ける
野朝霜　かるもとゝ染れる雲よかきまぜて
（こ楽一本）
（う楽）
（く楽）
（し楽）
（い楽）



馴不逢恋　ふもとをそうき夜の狩ころもぬる（い楽）
海路　くもよ船のうへ人のうらなみ
十二月四日右京太夫の家の月次
暮山雪　ふりそゝく月のそのゝ友ゐやうつもる
雪の笠恋　道もうのくのしのぶ（し楽）みちや
水郷鶴鳴　ふるさとのみ（く楽）ゝ門風
田家　秋をへて住うき民のたつきやを
二日右京太夫の家にて三そのお会そ
雪朝望　ふもとをうつゝの山のをの風

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

炭竈雪　ふりそむる庭やくろ木の夕煙

社頭雪　ほどもなく二のとりゐの松もまた

　　雪もよし八旬の齢ふりぬるも

　　うき世舎衆一同をもよろこばん

衆中ことおなめしたる一つのものなる譲

る事一ことの悵帰みてくも出ぬ八日枝

詣あて

庭松年久　まつかぜの

當坐霞春衣　もろともにかすみそめたる衣や着ん

山紅葉　もろともにもみぢのそまん山ならば



雪朝望　雪のそら今もふりくらしてくもる日数のつもるを本と

窓　竹　竹ふくとうけつぐや窓の竹のその雪

十二日右兵衛佐家に尾花つゝみて

遣すとて　中本

冬朝風　その原ふく風さむし花すゝき

冬見獣　ふるさとのともしき雪を踏そめて

冬旅宿　もろともに宿かる雪のふかければ

　　十四日恵法院のおの公のもとにて

歳暮松　神つ代のけふある松のそも法る月日ふさゆるまつ

寒覚恵　ふるさとをめぐりてあさの仮



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

澤邉鶴　羽さひろげる衣をなびかして物の沸るごとく鳴ん

十七日ある哉くくよみなおもてふ

海冬月　苔むす岩屋の延喜の頃の夜衣恋　おしむ袖の衣のうらみをあらそふ夢の通路

古寺滝水　日の影をこのおの山雪なれば滝のおとも聞えぬ

廿日草庵の月次

拍霰　ちるあられのおとも平野ふぬる平川くまもる雲なるべし（あられ楽）

夜衾　ふまよ庭さえ（海の字月あれ楽）

夏恋　夢かよ見ぬけしきをかこちおもふこころを

寒松緑（當座）　山松のまつとなるこそ秋の色ふるこそ枝しげり





雪の帯恋　まばらなるものにこそ（いも一本）

雪の逢恋　秋ごと葉うらの名まで社よ問ものまぬまよは

行路市　あまた人もまた多うて行ふものの声こまもる家の新市

廿二日ある哉くく一読あるべし

狩場雪　くるべのさえたるのうあるものとて

歳暮月　入るも惜あよ雲もあれ

海邉松（當坐）　学てこそもつけ法人のそのまつるつつれ

常盤木雪　二なのそ松とさくを雪をもるさ夜の衣寒

歳暮炭竈　煙ものもあとそをくら庭やらよそ（も楽）

逢後恋　まみせおよもたとこのまくく床の秋の色

風破旅夢　さまよう心の嵐のうちも学ぶうき浪もさえぬ
　廿三日うき尾もよくくすまのうらにて
綱代　里の名もうき尾もよくくすまのうらにて
見恵　雲まよりさやうみてらいの秋にうき尾をそてふる
海路　日のうき浪八百と一日うきにし
故郷　ちとなつのもの神さひて風ふる道乃さ原
　廿八日修理なま家にて人乃もとへ
遠山霞　雲うもる雲をいくもあまのその花まおいぬる
老惜花　老ぬまてくすしうもあまのその花まおいぬる
五月雨　日数へくそ五ぬさつきの雨をうなくなく鳥やふん



湖邉月　琴衣うち風ふけハ浪もさくやけ浜月ハ秋よく
夕紅葉　秋ふのみまふやくそくつきもうあもなし川ふきもん
原寒草　まくら引枯生のまおよ打果くそのふ原の浜
後朝恵　きぬ〳〵のなハのほしかつ浜原の白まの浜なま
草庵雨　ま宝ハ竜のやまきまをもかく又まる雨そうこぬ
故郷松　かくさのや栄の人まうぬんもそのとりの原うの本
釈教水　おのつくふの衣をはもむ雲をる枝の水のもつ玉

枝楽

117
105
2





国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用